

第二編 開拓創業

一 概 説

明治元年箱館裁判所がおかれ翌二年七月開拓使の設置となつて、北方開拓の業はこゝにはじめて国家の重要方針となつた。当局者の熱意と世界知識の吸収は、本道今日の基本的性格を形成したといつて過言ではない。十五年、開拓使を發して函館、札幌、根室の三県を置き、本州にならつた分治策を採つたが、世評がきびしくその沈滞を指摘したので、僅か数年でこれを廢し、十九年一月北海道庁を設置するに至つた。本篇は以上の期間における日高の開拓創業の経過を敘述しようとするものである。

日高における新時代の幕は、先ず請負人制度の廢止によつて切つて落された。請負人の功罪はしばらく置いて、明治二年九月、土地人民を解放すべき新政の趣旨は、こゝ北辺にも徹底して、永年漁場経営に従事した請負人は一斉に退去を命ぜられた。そしてかの沙流の山田文右衛門の昆布礁のごときも、その罷免と共に空しく砂中に埋没し去るという結果になつた。しかし、三石の小林重吉のごときは、自重して後に漁場持を命ぜられ、文明開化の新知識を以て、本道最初の西洋型帆船の所有者となり、わが国海員学校の発端をつくり、あるいは大規模な蚕室を営み、また清国向刻昆布の工場を設けて数十人の従業員を役するなど、全道に光彩を放つようになつたものもある。

場所制度の廢止後、応急の措置として所謂使省藩土族寺院分治法を布くこととしたが、応諾を拒む藩もあり、あるいは利益追及に専念して没収されるもの、または優柔不斷で着手しなかつたものの中に、仙台藩士はいち早く名家三好五郎に引率されて佐留太

一 概 説

四七

第二編 開拓創業

四八

(富川)に入り、困難な営農に苦闘し、学校経営、土人の撫育、米作の創始等に美績を残した。これとやらんで門別に移つた彦根藩士民は着業の年に領治を廢される運命に立至つて空しく四散したが、才物飯田信三など素志を饒みざるものは、近江商人の本領を發揮して、漁商牧林業に活路を見出し、よく西部日高の実業界を牛耳つた。

不評な増上寺支配のあとをうけて稲田邦植の一回は特別に上陸し、輸送船の沈没、貯蔵家財の焼失等の苦難にも屈せず、淡路を脱出した悲愴な決意を以て自から背水の陣をしいて染退河畔に着々創業の巨歩を進め、また早くも益習館なる学校をおこして新知識の普及につとめた。帯刀二年間、自から農業につとめた邦植以下の成績はよく開拓使の認めるところとなり、幾多の恩典に預つて士族移民団の成功せる範例として知られた。

このころ開拓使は東部諸郡を直轄して官吏にこれを経営させ、また南方移民の適否を試みんとして、天草の農民をあつく保護して杵臼西舎の盆地に殖民させた。これらは官營漁場ほどの失敗ではなかつたが、自然条件の不利と共に開拓精神の稀薄は、予期の結果をもたらすには至らなかつたが、本巢尾田等は拮据経営よく開拓使最初の受賞者としての榮譽をかも得ることが出来た。同じころ招募して幌泉に内地させた東北漁民は独身者が多く、出稼根性のままに景氣を逐うて離散するものも少くなかつたが、その行方をみるとき、何れも道内に踏みとどまつて各地の先駆者となつたことは注目し値いする。

開拓使の末期、赤心社という移民団が、官船蒸汽弘明丸に搭じて浦河に渡来した。これはこの地方に汽船の来た最初である。鈴木社長及びこれを扶けるキリスト教徒の一回は、朝夕粗末な草小屋の中に祈りを捧げつゝ、ひたすら開拓の難事業に励んだ。その清純な動機と近代的な経営とは、今日なお高く評価されている。三県時代になつて淡路の法華宗徒の団体が、当時の全国的不況の行つまを北海道の新天地で打開しようとして、団体長渡辺伊平の指導の下に静内郡ルベシベに入植した。その統制はかたく成績も見るべきものがあつて、小村落経営の範として広く喧伝され、後に伊平の胸に藍綬褒章が燦として輝くに至つたのである。

明治六年、後の北海道庁長官北垣国道が一理事官として浦河に赴任した。在任僅か二年に過ぎなかつたことは、日高の将来にとり

て惜しむべきであつたが、国道はこの短かい任期の間において浦河港の築設を当局に迫つて、湾形の測量を行わせ、またアイヌの撫育についても勝れた意見の持主として、本庁内の指導的役割を果した。またかの新冠に牧場を開くに至つたのも彼の卓見に基づくものといわれる。

陸続きの離島のごとき半島部の開発には、安全なる締地は不可欠なものであるにかかわらず、民力の弱小と理事者に人を得なかつたために、浦河の築港は国道去つて半世紀を経てようやく実現を見るに至つたのであつた。陸道は幕領時代から東部根室に赴く道路として全道に先がけて開ざくされたが、当期においては駅逓の整備のほかは道路工事のみるべきものはない。思うにこの頃からようやく石狩川流域の資源開発が道治の根幹となり、その方面の整備に重点が向けられはじめたこともあわせ考えなくてはならない。ここに沿岸時代は去つて内陸時代をむかへることとなり、土地の開発を促進する交通線の変化は、日高の開発に至大の影響をもたらすに至つたのである。

本篇に叙述した先駆移民団は、みな当代における全道有数の顕著な実例であつたが、これらは何れもまだ内地延長主義の耕作、加工にとどまつて、生産した雑穀のごときも消流の途も十分考えられてはいなかつた。したがつて新冠牧場によつて刺戟された馬産熱は民間にも波及し、半農半牧の業態を現出した。所謂帝國牧場などと称して官林中にみだりに放牧して自由畜殖にまかせ、殆んど資本と労力を要せずして、石狩方面の駄載馬の需要に応ずることができた。このような原始的馬産の風潮の中にあつて、かつて新冠牧場に勤務した岩根静一は波慮(豊郷)に牧場を開き、洋血を加えて馬体の改良につとめ、屢々品評会において優賞の栄を得た。これ馬産地日高の民間先覚者の最初である。後世日本随一の名を馳せた新冠牧場をそこまで推進したのは、実に米人エドウィン・ダンであつたが、彼は本来牛飼であつた。したがつて当時日高における肉牛の飼畜の盛大なことは今日の比ではなかつた。就中、十四年工藤助作はアイヌの本拠平取に地を卜して牧牛を開始し、牛と寝食を共にするという努力を重ねて、遂にその牧牛場は、全道一と称されるに至り、官もまた資金をあたえてその業を奨励したのであつた。

第二編 開拓・創業

海流の変化はしばしば凶漁をもたらして漁民の生活をおびやかすが、この時代においては、西部の鰯場をのぞき昆布が殆んど全部を占め、しかも全然薄生の声をきかなかつたから、住民は一年の中僅々六十日位働き、他は遊惰に時日を空費するに過ぎず、心ある一部の専業家をのぞいては滔々として儉安の夢をむさぼる者が大部分という状態であつた。しかし海難事故は頻りに起り、殊に明治十五年襟裳に難破した英船メリータサム号の場合は、九百人に近い遭難者が点在する民家に分宿するという混雑振りを現出した。農業における冷害冠水は適種のなかつたことと、原始河川の故とを以て初期農民に屢々痛烈な傷手をあたえたが、この外野馬及び鹿の害も軽視することは出来なかつた。明治十三年十勝に発生し、日高を襲つた飛蝗は、旱魃によつておこり霖雨によつて死滅した氣候異変の産物ともみなされるのである。

銃猟が盛んになるにつれて鹿は急速に減少の一路を辿り、また耕地をあらす野馬は新冠に駆集されてやがてそれは牧場の発達へと進んで行くのであるが、その一面鹿の減少によつて鹿を食料とする狼が飢えて新冠の馬群をねらつて蝟集し、このため全力をあげて狼の毒殺につとめたので、これより以後狼の姿は本道より消え去つてしまつた。次に鹿の著しい減少は鹿肉に依存するアイヌの生活を窮乏させることになり、ことに明治十二年春の大雪は、笹をかくして鹿群に大打撃をあたえ、これより後鹿の姿を見ることは甚だまれとなつた。ここにおいて札幌県は大規模なアイヌ勸業策を講ずることとした。かくしてアイヌは狩猟段階を去つて、農耕段階に進まなくてはならなくなつた。鹿群は絶えたが、それに吸引された獵人や皮買ひ商人等は、深く和人未踏の沙流川奥に分け入り、それはやがて奥地の開発を促進する機縁となつた。かく時代の動きにつれて、原始状態は急速に破壊されていつたけれども、他面新しい文化事象がその上に、日一日と置換えられていつたことを見逃してはならないのである。